

安心の設計

介護、医療、子育て、老
るご意見・疑問をお寄せ
メールansin@yomiuri.co
ファクス03・3217・9957

認知症

いろいろは

6

当たり前前の願い かなえること

社会の高齢化で、誰もが認知症と向き合う可能性がある時代を迎えています。認知症になっても安心して暮らせる社会の実現に何が必要なか。認知症介護研究・研修東京センターの永田久美子研究部長に聞きました。(聞き手 小沼聖実)



ながた・くみこ 1960年生まれ。千葉大学大学院修了後、東京都老人総合研究所を経て、認知症介護研究・研修東京センターに。地域に根ざした認知症ケアのほか、当事者や家族の支援などに取り組む。

「そんな小さなこと」と思っただけで議論を重ねても、具体策は見えません。認知症の人の普段の暮らしこそが大切で、その願いを聞き流さず、「それいいね」と言ってみることが、共生社会への第一歩なのです。認知症の人自身も、あきらめずに声を上げ続けることが大切です。国が昨年まとめた「認知症施策推進大綱」では、「本人発信支援」が掲げられ、「本人ミーティング」など、認知症の人同士が思いを語り合う機会も増えてきました。そうした場で当事者のつづやきを聞いた人が、周囲の人に働きかけ、願いを実現させた

永田久美子さん

会いたい人に会える。素朴な希望を口に出せ、ともにかなえていける社会です。難しく考える必要はありません。たとえば、和歌山県御坊市の銭湯では、認知症の常連客の声をきかずに、シャンプーのボトルに「あたま」と大きく書くことで、自分で入浴が続けられる工夫をしています。

認知症に対する施策はいま、重大な転換期にあります。かつては、医療や介護の専門職が主体の「支援提供型」。認知症の人は世話を受ける一方で、地域の中で暮らし続けるのは困難でした。近年は、なじみの地域で

自分らしく生きようとする人が増え、専門職だけでなく認知症の当事者や地域住民も一緒になって、安心して暮らせる「共生社会」を作る方向に変わっています。

共生社会とは、認知症でも、行きたいところへ行け、

例が生まれ始めています。「野球観戦に行きたい」「映画が見たい」と話した認知症の人が、同じ趣味を持つ住民と一緒に観戦・鑑賞に出かけたり、「地域の役に立ちたい」と願う認知症の人が、人手不足に悩む宅配業者や米屋で働くようになったり。

1人の願いをかなえることを通じて、地域のつながりが育っていきます。1人うまいくくと、ほかの人にも広がっていきます。小さな願いを一緒に楽しみながらかなえてくれる人が増えたら、本人はもちろん、家族もどんなに楽になるか。新型コロナウイルスの感染拡大で、私たちは、買

物すら気軽に出かけられない不自由さを経験しました。それは、認知症の人が、以前から強いられてきた暮らし方です。

今なら、行きたいところへ行き、会いたい人に会えることがどれほど貴重な、リアルに感じられるはず。そうした「当たり前前の暮らし」を続けられることが、

安心して暮らせる地域の鍵なのです。

誰もが認知症になる可能性があります。「認知症になったから、よろしく」と、気軽に言い合える社会になってほしいと思います。

*「認知症いろいろ」は今回で終わります。10月6日からは「備える終活」の続編が始まる予定です。